

若年運転者の交通事故発生要因とその機構に関する研究（昭和 63 年度）

若年運転者による交通事故は深刻な社会問題であることから、昭和 62 年度の調査研究結果を踏まえ、若年運転者が起こした事故の発生要因及びその機構・経過についての特質を明らかにするとともに、その運転行動の背景となるこれら運転者の意識態度構造も明確にした。

- ① 昭和 63 年 10 月、11 月に発生した交通人身事故 1,710 件の第 1 当事者とその取調べを行った警察署担当者にアンケート調査を行った結果、20 歳未満の運転者の 9 割前後が「運転すること自体楽しいことだ」と思っており、車を自己を表現する重要な手段として認識しているとみられる。一方、若年運転者は違反を容認する意識が強く、攻撃的運転傾向が強い。また、先急ぎの運転を続けており、運転への集中心に欠けるなども目立っている。
- ② 自らの運転を慎重でないとしながら、危険な運転行動を続けているのが、若年運転者の特徴である。若年運転者は、相手を認知しながら事故となったケースが多く、相手を認知しないで事故となったケースでは、「何かの陰になって相手が見えなかった」「運転以外のことをしていた」が多い。さらに、若年運転者には、交通に関する知識不足の傾向、さらに、考え方が幼稚、責任感が欠けるといった傾向も強い。
- ③ 若年運転者の事故防止のために必要な課題として、若年運転者は、事故回避可能地点で相手を発見しながら「危険はないと判断」して事故となった例が多いのが特徴であるため、相手の認知時点における判断、行動のあり方に関する指導、教育が必要であり、シミュレータなどを利用しての擬似的事故体験などのトレーニングがより効果的と思われる。また、一概に若年運転者といっても、その運転意識や運転行動には個人差が大きいため、個々の運転者の特性に合わせた教育、トレーニングを工夫していくことが重要である。自己の運転がどのような危険性を持ち、どのような場面で事故を起こしやすいかといった指導が工夫されるべきであろう。
- ④ 若年運転者の違反容認傾向をなくすためには、違反と事故の関連を実証的に繰り返し教育していくことが重要であろう。なお、若年運転者には、交通ルールに関する知識が不足している傾向がみられており、それらの知識教育も重要な課題である。また、若年運転者は、車を自分自身を表現する手段とみなしているが、若者に、車以外に自己実現の場をどのように提供できるか、または若者自身がどのような自己実現の場を発見できるかは単に交通の問題だけではなく大きな社会的な広がりをもった問題として、家庭、学校、社会などが一体となって真剣に取り組んでいかなければならない重要な課題であるといえる。

図 年齢層別にみた運転行動の因子分析結果

